

聖書：創世記 9：1～17

説教題：虹が雲の中に

日時：2023年5月7日（朝拝）

6章から見て来たノアの大洪水の話の最後の部分です。神は地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になり、地が暴虐で満ちているのをご覧になって、大洪水により、地をさばくことを決められました。6章では神がノアに箱舟を造ることを命じ、ノアがその通り従ったことが記されました。7章ではその箱舟に入るように！との神の命令があり、大洪水が起こった様子が記されました。8章では水が引き始め、神の命令を受けてついにノアたちは箱舟から出たこと、そしてまず神を礼拝したことが記されました。そして今日見る9章ではノアたちに対する神の言葉が記されます。

まず神は1節でノアとその息子たちを祝福して、こう仰せられました。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。」これを聞いて思い起こす言葉は何でしょうか。それは創世記1章28節に記されていた天地創造における神の言葉ではないでしょうか。神は人を創造した後、彼らに言われました。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」あの時と同じ言葉がここでもう一度語られています。つまり神は洪水後の世界に天地創造の時と同じ言葉をもって再スタートを与えておられるということです。この時そこにあったのは罪のためにさばかれた世界です。この世界にもう明るい将来はない、人が増えても良いことはないとして、かつての方針は撤回し、取りやめにして、この世界を投げ捨ててもおかしくないところです。しかし神はもう一度本来のあるべき世界に向かつての新しいスタートを与えてくださいました。

しかし状況は以前と異なっています。2節に、動物たちの内に人間への恐れとおののきが起るとあります。参考になるのは6章12節です。そこには「すべての肉なるものが、地上で自分の道を乱していた」と言われていました。この「すべての肉なるもの」の中には動物たちも含まれることが、たとえば8章17節を見ると分かります。つまり人間の墮落の影響は動物たちにも及び、その結果、動物たちも道を外れ、人間を襲うような状況があったと考えられます。しかしこれから人間が増え広がって行かなければならない中、神は動物たちの内に人間への恐れとおののきがあるように

されました。人間を守るためです。さらにここで初めて肉食が許可されます。3 節に「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物となる」とあります。これまでは緑の草が彼らに与えられていた食物でした。創世記 1 章 29 節で神は最初の人に「見よ。わたしは、地の全面にある、種のできるすべての草と、種の入った実のあるすべての木を、今あなたがたに与える。あなたがたにとってそれは食物となる。」と言っておられました。なぜこのような変更があったのでしょうか。これは洪水後すぐの荒れ果てた地では草や木の実といった食物が手に入らなかったということがあったからかもしれません。しかしおそらくそれ以上に洪水後の世界ではこれまで以上の活力が必要とされたからではないでしょうか。聖書に記されている人間の寿命を調べると、ノアの洪水を境にしてどんどんそれは下がって行きます。これは大洪水によって大きな環境の変化がこの世界に生じたことを示唆するのではないかとされます。そのような環境下で人間が地に増え広がるため、そして人間の使命を力強く果たすために肉食が許可されたのではないかと考えられます。ただし血のあるままで食べてはならないと 4 節に言われます。血はいのちそのものであると言われています。これはいのちに対する尊敬ゆえに、血がそこにある状態で、肉にかぶりつくようなことをしてはならないということです。

そして 5 節以降では人間の血について語られます。動物の血に対してさえ敬いの心を持つべきなら、人間に対してはなおのことそうであると。そして人間の場合は血を流すこと、つまり殺すことそれ自体が禁じられます。このようなことがあえて言われるのは墮落後の世界では人間が人間を殺すことが現実であり得たからでしょう。先に神は動物に人間に対する恐れの心を与えて動物が人間を攻撃することがないようにされました。しかし人間の命を奪いかねないのは動物だけではありません。人間が人間を殺すことも考えられます。実際、アダムとエバの子のカインは弟アベルを殺しました。またカインの子孫のレメクは、自分が傷を受けたらそのために誰かを殺す、77 倍にして返すと言っていました。そんな墮落した世界で、人を殺した者が見過ごしにされないよう、神は 5 節のことを述べておられます。「わたしは、あなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する」と。獣がそうしたら獣の命を要求するし、人すなわちその兄弟がそうしたら、その人にもそうすると。6 節にある通り、人の血を流す者は自分自身の命をもって償いをしなければならない。その理由として「神は人を神のかたちとして造ったからである」と言われています。

ここに墮落後の人間もなお神のかたちであると言われていました。人間は墮落によって最初に造られた栄光ある状態から大きく落ちました。神を映し出す存在が、今や神を正しく映し出さない者となりました。しかしここに墮落後の人間もなお神のかたちであると言われていました。失ったものがあるという意味では確かに神のかたちの中で失った面もあるのでしょうか。しかし墮落によって全部失ったのではない。人間が人間である限り、なお人は神のかたちであり続けているという聖書の主張がここにありません。そしてここに人間の尊厳の根拠があります。すべての人は神が刻印されている尊い存在なのです。従って人を殺した者はそのまま見過ごしにされてはいけません。その人は自分の命をもって代償を支払わなければならないとされています。人間のいのちはあまりにも尊いので、他のものでは償えず、同じ重さを持つ人の命をもってしてでなければ公正さが保たれない。そこでそのいのちを要求すると神は言われます。これも人を殺す悪が横行しないための神の処置です。このような規制がなければ、人の悪は暴走しかねません。ここに人の血を流す者は、「人によって」血を流されると言われています。これは後の公的権力による、いわゆる剣の権能につながる聖書の言葉です。私たちは個人として復讐をしてはなりません、正義のために立てられた公的権力によってこのことは実行されなければならないということです。それは罪が抑制され、社会の内に平和がいくらかでも保たれるようになるためです。こうして神は人間の命が守られるための手立てを講じた後、7節でもう一度、繰り返されます。「あなたがたは生めよ。増えよ。地に群がり、地に増えよ。」 こうして洪水後の世界に再出発のチャンスに神は与えてくださいました。

8節以降には神が洪水後の世界に与えてくださった契約のことが語られています。9節に「見よ、わたしは、わたしの契約をあなたがたとの間に立てる」とあります。この契約は当事者が互いに相談し、あるいは協議して合意に達し、その上で結ぶといった契約ではありません。これは神が一方的に宣言し、立てる！と言われる契約です。その対象はノアや彼の家族、その子孫ばかりでなく、10節を見ると、すべての生き物、この世界の全被造物をも含むことがわかります。ですからこれは双方が相談して合意するというような契約ではありません。しかし神が一方的に立てたからと言ってノアたちに不利となる契約ではありません。これは恵みに満ちた契約です。神は11節で「すべての肉なるものが、再び、大洪水の大水によって断ち切られることはない」と言っておられます。神はこの契約においてご自身がこの世界を保持してくださると約束くださっているのです。

12 節以降では契約のしるしのことが述べられます。契約のしるしは契約を確証するものです。そのしるしは虹であると言われます。これはこの契約にふさわしいものと言えます。後に見るアブラハムの契約のしるしは割礼でした。それはその契約にあずかる個々人、代表としての男子一人一人の上に記されます。しかしこの洪水後の契約は被造物世界全体に関わります。ですからそのしるしは天にかかるものとされます。この契約は世界全てを包含するものであることが、この虹という天にかかるしるしに良く示されることとなります。

果たしてこの虹にはどんな意味があるのでしょうか。興味深いことはヘブル語において「虹」は「弓」と同じ言葉であることです。確かに虹は空にアーチを描く弓のようです。英語で弓は bow であり、虹は rainbow であることも思い起こされます。ある人はこのことに注目して、空に虹がかかる時、それは弓を横に置いた状態となり、それは戦いが止んだこと、すなわち神との間に平和が全地の上にあることを意味すると言います。そこまでの意味がこの契約のしるしに込められていたかどうかは議論があります。創世記 9 章本文では「雲の中に虹が現れる」と言われています。雲は雨を降らせるものであり、洪水後の世界に生きる人々にとっては脅威となるものでもあります。しかしそこに虹が現れます。それは雨が終わりとなり、光が差し込み始めていることを意味します。その雲はさばきを起すものとはならず、むしろ光が地に差し込んでいます。そして虹は天高くにかかります。それを見る人は誰もがホッと、またその美しさに魅了されるでしょう。それは確かに世界全体の上に神の祝福が臨んでいることを象徴するものとなるでしょう。

そして心に留めるべきは、その虹を見て契約を思い起こすのは誰かということです。それは神であると 15 節と 16 節で言われています。つまり神がこの契約に忠実でいてくださる。もちろんこれは神が見て思い起こすものだから、私たちには関係がないということではありません。もしそうなら神はこのことをノアたちに知らせる必要はありませんでした。なのにこのように語られたということは、もちろんノアたちが益を受けるためです。また私たちが虹を見る時、思い起こすためです。すなわち神がこの約束をいつも覚えていてくださる！神が一方的な恵みをもって、この契約を真実に果たし続けていてくださるのだ！と。最後にもう一度、神はノアに確認しています。17 節：「神はノアに仰せられた。『これが、わたしと、地上のすべての肉なるものとの間

に、わたしが立てた契約のしるしである。』」

以上の箇所私たちが見るのは何でしょうか。それは洪水後の世界を神はなお祝福くださっているということではないでしょうか。神は罪に堕ちたこの世界を捨ててはくれません。一旦洪水によってきよめた後、手立てを講じて、再スタートを与えています。そして二度と大水が地を滅ぼすことはないと言われました。しかし私たちはいつまでもそんなのではないということも一方では心に留めるべきです。8章22節に「この地が続くかぎり」とありました。つまりこの世界の終わりの日があるということは考えられています。その日まで神は今回の大洪水のようなさばきは行わず、世界を保持すると約束くださいました。なぜでしょう。それはその間に人々に救いを提供するためです。この世界はアダムが造られた最初の時とは違っています。動物との関係が正しくない状態になっています。また殺人が起こり得る世界であることが今日の箇所にも述べられていました。いや私たちは今日、毎日のように殺人のニュースに接しています。そんなこの世界はパラダイスではありません。いつまでもこのまま続くのが望ましい世界ではありません。にもかかわらず神は同じような洪水のさばきを全世界に起こすことはしないとされます。それはその間に、神が忍耐して待っている間に、私たち一人一人が本来の正しい歩みへ立ち返るために他なりません。ノアのように神とともに歩む正しい歩みに立ち返り、真の救いにあずかるために他なりません。

ですから私たちは虹を見るたびに神の憐みのメッセージを思い起こして感謝したいと思います。この世界は当面大丈夫だ！さばきはすぐには起こらない！安心した！と言って、ではもうしばらく気楽に自分の好きなように歩もう！とするのではなく、この貴重な憐れみの時を感謝して、自らの救いのために生かす者でありたいと思いません。もしそうしないならどうなるでしょう。ローマ人への手紙2章4～5節：「それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」本来、大洪水のさばきは何度、地を襲ってもおかしくありませんでした。しかし神はこの洪水後ノア契約を今日も忠実に守り、私たちが規則正しい生活ができるよう、この世界を支えてくださっています。そして今なお、「生めよ、増えよ、地を満たせ、地を従えよ」とこの世界を御心に沿って管理する命令とチャンスを与えてくださって

います。私たちは与えられているこの憐れみの時を無駄にせず、これを生かす者へと導かれたいと思います。またノアの大洪水のさばきの後に今日の章で見た平和な時が与えられました。これはやがての最後のさばきを経て最終的な平和の世界、祝福の世界が与えられることを指し示すものでもあります。私たちはその日が来ることを見つめて、今日与えられている尊い時を生かす者でありたいと思います。虹を見るたびに、それが証しする神の憐れみのメッセージを心から感謝して受け止め、その恵みに応えて神とともに歩む生活へ、そしてやがて現される永遠のいのちの祝福に入る者へと導かれたいと思います。